


 受賞の言葉

たかつき やすお

2002年慶応大卒、10年東京大大学院経済学研究科博士課程修了。博士号(経済学)を取得。東京大助教を経て、11年より神戸大経済経営研究所講師。1979年生まれ。




---

 市場経済といかに向き合うか

神戸大学講師 高槻 泰郎

天下ノ智ヲアツメ血液ヲ通ハシ大成スルモノハ大阪ノ米相場ナリ——。19世紀初頭に山片蟠桃が「夢ノ代」で謳った大坂米市場は、はたして天下の智を的確に価格へと反映する市場であったと言えるのであろうか。もしそうであったとすれば、なぜそれは可能となったのか。この素朴な問いに、経済史学の立場から挑んだのが本書である。

結論を言えば、本書は山片蟠桃の観察を支持している。近世中後期の大阪米市場は、過去の値動きを観察することによって超過収益を獲得することができない市場であったという意味で情報効率的な市場であり、その価格は飛脚や旗振り通信によって、隣接する大津米市場へ一刻を争って速報されていた。かかる市場の働きを支えたのは、現代のトレーダーにあたる米仲買たちが結成した株仲間と、米市場における契約履行を保証し、市場の歪みを矯正するべく種々の政策を打ち出した江戸幕府とが構成した重層的な取引秩序であった。

かく論じ終えて、筆者の心を強く捉えたのは、近世米市場の歴史が、自由化と江戸幕府による介入という2つのベクトルが交錯する歴史であったということである。自由な市場の働きを支えつつ、いかにそれがもたらす負の効果を抑制するか。かつて江戸幕府が直面したこの課題は、現代における政策当局が直面している課題と本質的に同じである。市場に対して強い影響力を持っていた鴻池屋善右衛門・加島屋久右衛門などの豪商に政策を諮問し、必要と判断した部分だけを政策に取り入れた江戸幕府のしたたかさ。江戸幕府の要求に応えつつ、自らの家業を第一に考えていた大坂商人のしたたかさ。両者の駆け引きに、筆者の興味は尽きることがない。

最後に、本書が大変栄誉ある賞を授与されたことを機に、現代に暮らす我々が直面している諸課題に取り組む上で、歴史的事象が有益な分析対象となり得ることが、より多くの方々に認識されるとすれば、筆者にとって望外の幸せである。